

聖書箇所には、イエスが十字架に架けられる場面が記されていますが、それ以上に細かく描写されているのは、そのイエスを罵る人々の姿です。「神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。そうすれば、信じてやろう」…この人々の罵りには、イエスが何者であるかを我々が見定めてやろうという思いが潜んでいます。そんななか、イエスは叫びました。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ（わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか）」（46節）。この言葉を聞いて人々は確信したことでしょう。「そら見たことか！やはりこの男は神の子ではなかった。我々の見解が正しかった」と。だとすると、イエスを救い主として受け入れるように促している聖書は、なぜその妨げになってしまうようなイエスの叫びを伝え続けてきたのでしょうか。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」。よく考えますと、このイエスの叫びは誰もが自信をもって口にできる言葉ではありません。というのも、「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と言った瞬間、その「なぜ」に対する理由がいくつも思い浮かんでくるのが私たち人間ではないかと思えるからです。心ない一言で誰かを傷つけたり、自分のことを棚に上げて誰かを非難したり、誰かに責任を丸投げしてその人を苦しみ悩ませていたり…神に見捨てられてもおかしくないような罪を、誰しもが見えるところ見えないところで犯してきたのではないのでしょうか。ただ一人、罪なき方が見捨てられた者となり、本来ならば神に見捨てられても仕方のない者たちが自分の正義を振りかざして叫んでいる、それが本日の場面です。十字架のイエスを罵る者達が「イエスは何者か」を見定めているようでいて、実は、その者達こそが十字架のイエスによって「あなた方は何者であるか」を問い返され、その正体を見定められているのでした。

ある記者は語ります。「次々に起こる痛ましい事件。そして、それを責め立てる声に同調していく世の糾弾の構図。ふと考えれば、それは事件を起こすまで、その人の心を追いつめた見えない暴力や圧力やいじめの構図と何ら変わらないのではないか。一つ一つの事件は、私達に問いかけているのだ。その人をそこまで追いつめたものは何であったのか。もし、あなたがその人と同じ境遇に立たされていたとしたら、果たしてどうであったのか、と」。十字架のイエスの叫びは、私達が相手を問い詰める側にいるようでいて、実は神の前に問い返されている者であることを示し続けています。

（文責：望月達朗牧師）

